

上、例えば六信五行がムスリムの信仰の対象や行為となっていく経緯についての説明がなされるべきだったのではないだろうか。

また神学、そして哲学などイスラーム思想上の重要な分野に対して頁が割かれていない。尤もこの点は既刊である『ユダヤ教の歴史』や『キリスト教の歴史1、2』も同様の傾向であるので、シリーズの方針の問題であるかもしれない。しかし、特に神学はムスリムの信仰の問題を扱い、世界観や他宗教観など、現実の社会に関わる分野であると思われるので、この点もう少し体系的な記述が欲しかった。なお蛇足ながら、巻末の附録は質・量ともに充実しており、特に歳時暦の項は必読である。

以上、充実した内容を有する本書に対して、わずかな瑕疵に難癖をつけ、雑駁な感想を述べてきたが、本書の内容が最新の研究や長い学究に裏打ちされたものであることに変わりなく、最新のイスラーム概説として一読に値する書物であることを最後に強調し、擲筆する。

(橋爪 烈 日本学術振興会特別研究員 (PD))

小杉泰編『イスラームの歴史2 イスラームの拡大と変容』山川出版社、2010年

山川出版社の「宗教の世界史シリーズ」全12巻の1冊である。このうちイスラームには2巻が割り当てられており、『イスラームの歴史1 イスラームの創始と展開』（佐藤次高編）に続き、近現代を扱う巻となっている。

キリスト教やヒンドゥー教も含む本シリーズは、「人びとの生活に息づく信仰に踏み込み、地域的な広がりにも着目する」と謳っている。実際、この巻は、限られた紙数の中で、人間生活の多様な領域や地域性のバランスをうまくとって構成されている。計6名による分担執筆だが、1冊のまとまった読み物として仕上げられており、イスラーム世界の動向に関心をもつ読者に推薦したい。近年のイスラーム地域研究の成果もふんだんに盛り込まれており、イスラームの研究者もこの本を通読することで、自らの作業をイスラーム研究全体の中で再確認できるだろう。

まず、巻頭のカラー写真が目を引く。新生児の命名式（パキスタン系イギリス人）、割礼祝いの正装をした兄弟（イスタンブール）、金曜礼拝の説教を聞く信徒たち（中国青海省）、モスクの文様を修復する工芸家（イエルサレム）、女性ダンサーたち（マスカット）などなど。カバー裏にも色鮮やかな衣装をまとったアフリカ系の女性たちが配されている。多種多様なムスリムの生活を活写したものだが、「このような写真は初めて見る」という読者も多いことだろう。筆者が特に気に入った一枚は、マレーシアの女子高生たちである。ランの花柄をあしらった制服と、キャプションとして附された「3人の娘を育て上げた親は楽園に入る」とのハディース（預言者言行録）がことのほか印象的である。イスラームと聞くと、紛争や対立、女性への抑圧を連想してしまう私たちの固定観念をゆさぶる仕掛けとして、巻頭の写真が配されているのだろう。最初に同時代を生きるムスリムたちの写真をじっくり見ることで、彼らの歩んできた近現代史を読み解いていくことへの期待が増幅される。

本文目次を見ていきたい。

- 第1章 近代と邂逅するイスラーム（小杉泰）
- 第2章 イスラームの再構築（小杉泰）
- 第3章 スーフィー教団の革新と再生（東長靖）

第4章 アフリカに拡大するイスラーム(坂井信三)

第5章 中央ユーラシアの変容と波動(小松久男)

第6章 南アジア・イスラームの動態(山根聡)

第7章 東南アジア・イスラームの展開(小林寧子)

第8章 グローバル化時代のイスラーム(小杉泰)

まず、編者である小杉泰氏の担当する第1、2章において、思想自体の持つ力(革新性といっても言いだろう)、思想を伝播させるツールとしてのプリントメディアの活用、その帰結としての政治・社会運動や教育の活性化が骨太に提示される。続く第3章では、歴史上イスラームの主流をなしてきたスーフィー教団の革新と再生が描かれ、これによって全体の枠組が提示される。第4～7章の各地域の執筆者が、この前半部に呼応して記述を進めているので、地域の事例に即しながら、歴史の大きな流れを把握することができる(章によっては数百年にわたる変遷を扱うため、以下の記述は、印象に残った点をピックアップするという形となっている。了解いただきたい)。

第1章「近代と邂逅するイスラーム」は、ワッハーブ運動の改革思想から始まる。そして、18世紀アラビア半島で始まったこの運動と同時代的に共振したものとして、シャー・ワリーウッラー(南アジア)、十二イマーム派のビフバハーニー(イラン)、ザイド派のシャウカーニー(イエメン)、ウスマン・ダン・フォディオ(ナイジェリア)らの活躍が列挙される。近現代のイスラーム世界はさまざまな課題に直面し、解釈の革新を必要としたが、その思想的な原点を提示するにあたって、地域や宗派の観点から複眼的な記述がなされている。一地域の事例でイスラームを代表させるのではなく、さまざまな地域の複数の事例を通じて、大きなうねりが作り出されていたことを読者に伝えている。第1章は、さらにアフガーニーとパン・イスラーム主義、国際雑誌としての『固き絆』、『マナール』(1898-1935)の重要性を指摘して締めくくられる。そして、第2章では、大衆運動の到来を告げたムスリム同胞団へと話は進んでいく。後半では、モスク建設や喜捨といった草の根レベルにおける社会的活動と、法學ルネサンスが取り上げられている。古典文献への「追従」を乗り越え、イスラーム法の現代化を目指した思想家たちにとって、「イジュティハード」(解釈の営為)はきわめて重要なテーマであったのであり、本書全体においてもキーワードとなっている。

第3章「スーフィー教団の革新と再生」では、ヨーロッパ植民地主義の衝撃のもと、スーフィズムやタリーカはどのような変革を遂げたのか、前章に登場する人物や時代状況を踏まえつつ論じている。たしかに近代においてスーフィズムやタリーカ、ならびに聖者信仰はイスラームの内部において批判の対象となったが、その内実がきわめて多様だったことを、本章は多くの事例を挙げて説明している。また、近代になって批判にさらされたスーフィズムが変質を遂げたとするネオ・スーフィズム論について、思想の変質という観点からは無理があるとしつつも、組織形態として斬新なタリーカ(一例としてティジャーニー教団)を併せて紹介するなど、学説的な展開もコンパクトにまとめている。なお『イスラームの歴史』において、東長氏は1巻と2巻の両方で執筆しているため、この文章は独立したものではあるが、1巻第5章「スーフィズムの成立と発展」の続編としての色彩が強い。第1巻では、スーフィズムが哲学から民間信仰までを含む重層的な展開を遂げつつ、いかにイスラームの主流となっていったかについて述べ、基本的な概念群を提示している。こちらを読んだうえで臨めば、本章の理解度も一段と高まるはずである。評者が面白いと感じたのは、普遍宗教の主張に連なる今日的なスーフィズムの動きも、最後に収めている点である。欧米人の改宗ムスリムや移民のスーフィーたちが織りなすグローバル化の最前線では、「これはイスラームの一

線を越えているのでは」という思想が展開されている。しかし、第1巻と併せて読むとき、実はそのような放逸さを含むものとしてスーフィズムは常にあったであろうことに思い至るのである。

第4章「アフリカに拡大するイスラーム」では、アフリカを西アフリカ、インド洋岸のスワヒリ地方、そして南部アフリカの3つに分けて話を展開している。東では19世紀前半に、オマーンの勢力が展開した海上交易によって、経済的繁栄がもたらされた。そして、その中心となったザンジバル島は、新たに宗教学者の集合する学問センターとなっていた。西では、植民地支配状況において、カリスマ的なスーフィーたちが活躍した。アマドゥ・バンバ(1850-1927)が率いるムリーディー教団が代表的な事例として取り上げられている。短いながらも興味深いのは、南部アフリカにおけるムスリム・コミュニティの形成である。17世紀、オランダ東会社がケープをアジアの植民地の政治犯の流刑地として利用したことで、「ケープ・マレー」と呼ばれるムスリムの集団が成立していった。19世紀になると、今度は開発のためにインド人労働者が送り込まれた。そして、その中に含まれていたムスリムが第二の集団を形成していったのである。第3章に続いての本章からは、現代社会においてスーフィー教団の有する活力をはっきりと確認することができる。

第5章「中央ユーラシアの変容と波動」においても、近代におけるイスラームの改革が、カイロ発の『マナール』誌等によって触発されつつ、まずは新方式学校と定期刊行物の普及によって活性化したことを伝えている。しかし中央アジアのムスリムの歴史は、長期の社会主義体制を経験したことで独特なものとなっていく。とりわけスターリン時代のソ連においては、戦闘的な無神論が宣伝されるなど国内で抑圧されただけでなく、海外のイスラーム諸国からも隔離されてしまう。世俗化したソヴィエト社会において、割礼や葬儀などの民族的な伝統としてのみ、イスラームは存続したのである。このような歴史的経緯を踏まえるとき、1980年代末以降、「慣行に堕してしまったイスラームの現状」を厳しく批判し、かつきわめて政治的なスタンスをとるワッハービーがなぜ中央アジアにおいて勢力を拡大していったかを、読者は深く理解することができるのである。

第6章「南アジア・イスラームの動態」(山根聡)は、シャー・ワリー・ウッラーから、アフマド・ハーン、デーオバンド学派、ヒラーファト運動、そしてイクバル、ジンナーへと展開していく。ウルドゥー語紙の普及がもたらしたムスリム意識の活性化を論じ、またパキスタンの建国詩人と謳われるイクバルの詩を織り込むなど、ウルドゥー文学を専門とする山根氏自身の研究の特徴をうまく生かした構成となっている。ただし、この章では、現代インド・ムスリムの動向に触れるところが少ないように感じる。本章の冒頭で触れられている「二重の周縁化」により、日本のイスラーム研究にはインドが、インド研究にはムスリムへのアプローチが、その対象の巨大さに反比例して大きく欠落しているのである。この部分は今後は正していかなければならないだろう。南アジアのムスリムを研究する者として、評者自身そのように反省する次第である。

第7章「東南アジア・イスラームの展開」では、海域ネットワークで結ばれていたムスリムが、設定された植民地支配の領域ごとに、いかに異なる対応を示したかを記している。20世紀初頭のインドネシアでは、近代的組織形態のイスラーム運動が展開した。ムハマディヤは1912年にジョグジャカルタで結成され、布教・教育・福祉を中心に活動した。この改革を求め、イジュティハドを推進すべしとする動きに対して、ウラマーの多くは慎重であった。彼らが1926年に立ち上げたのがナフダトゥル・ウラマー(ウラマーの覚醒)である。この二団体が、その後のインドネシア現代史においてきわめて重要な役割を果たしていくことになる。ここでも、『マナール』等による情報発信に刺激を受けつつ、地域の課題に対応していったムスリムの姿を確認することができる。

第8章「グローバル化時代のイスラーム」は再び小杉氏の担当であり、1970年代以降の動きを扱う。

すでに第1、2章において、イスラーム復興と呼ばれる現象はコンパクトかつ多角的にまとめられていたが、ここではその現代的な進展・深化を取り上げている。具体的には、人権と民主化を核とする現代思想、イスラーム銀行の発展、イスラーム諸国機構(OIC)の活動などである。移民やジハード主義についても詳しく触れている。

この本を通読することで、評者は、近現代におけるイスラームの動向を、もう一度じっくりと確認する機会を得ることができた。思想を軸に展開する歴史というコンセプトも斬新に感じられる。近現代史におけるスーフィズムやタリーカの動向を、具体的かつまとまった形で知ることができたのも収穫である。欲を言えば、21世紀という時代において、さらに大きな役割を果たしていくであろう NGO について、もっと書き加えて欲しかったところである。イスラームの価値観に基づいて、緊急支援、医療、教育、環境などの分野で活動する NGO の数は決して少なくはない。イスラーム復興の社会的重要性和その多様性をより具体的に考えようとするときに、貴重な材料を提供してくれるだろう。

2011年2月現在、チュニジアに始まった民衆の行動は、中東に大きなうねりをもたらしている。評者は、一方でBBCのニュースにかじりつきながら、本稿をまとめた次第であるが、遂にムバラク大統領が辞任を表明した。この大変動を理解するうえでも、イスラーム世界の近現代史についての知識は必須である。専門的な知識を、コンパクトにかつ噛み砕いた形で提供してくれる本書は有益な参考書となるだろう。

(子島 進 東洋大学)

Oroub El-Abed. 2009. *Unprotected: Palestinians in Egypt since 1948*. Washington D.C. : Institute of Palestine Studies, xxiii + 253 pp.

本書は、パレスチナ難民支援の現場に長年かかわってきた実務家兼研究者によって書かれた、エジプト在住のパレスチナ人に関する初の包括的な研究レポートである。著者のエル＝アベドは、ヨルダン政府パレスチナ関係庁や、世界銀行、国連などでイラクおよびパレスチナ難民に関わる業務に携わった後、ヨルダンのフランス中東研究所(IFPO)¹⁾で研究員を務め、現在はジュネーブの国際開発研究の大学院に在籍している。本書のもととなる調査は、著者がカイロ・アメリカン大学で講師として教鞭をとる傍らで、2001年から2003年の間に実施された。つまり本書は、移民・難民の生活を支援の現場と研究の両側面を知る立場から捉えた一冊といえる。

エジプトに住むパレスチナ人の存在は、これまで注目を浴びることが少なかった。その人数を正確にとらえた統計は存在しないが、様々な推計は2000年時点で約7万人という数字を示している(p.6)。彼らが注目されてこなかった理由は、こうした人数がパレスチナ難民の人口全体に対して占める割合が比較的小さいことに加え、エジプトがパレスチナ難民の支援機関であるUNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)の管轄地域から外れていることの影響も大きいと考えられる。ヨルダン、レバノン、シリアといった他のアラブ周辺諸国と異なり、難民の定着を恐れたエジプトは、自国内でのパレスチナ難民に対する国連の支援を要請しなかった(p.36)。その結果、難民の保護はエジプト政府およびPLO(パレスチナ解放機構)をはじめとする国内のパレスチナ関係の諸組

1) シリアのダマスカスとアレppo、レバノンのベイルート、ヨルダンのアンマーンに施設を構えるフランスの研究所で、正式名称は *Institute francais du Proche-Orient*.